

聖書：マタイ7：15～23

説教題：良い木と悪い木

日時：2018年11月11日（朝拝）

イエス様は今日の箇所で「偽預言者たちに用心なさい」と言われます。前の13～14節では「狭い門から入りなさい」と言われました。大勢の人々が大きい門と広い道を歩いている中、狭い門・細い道を見出して歩くことは困難です。そのためには誰かに助けてもらいたい。いのちに至る本当の道を知っている誰かに指導して頂きたい。そこで警戒しなければならないのが偽預言者。神に立てられたわけではないのに、自らそう名乗って人々を誤りに導く偽教師。これを今日に当てはめるとどうなるでしょうか。それは「偽牧師に用心なさい」となるでしょうか。あるいは偽伝道者、偽神学教師に気をつけなさい！これはこのように御言葉を語っている側の者としてはドキッとさせる言葉です。果たして私はどうなのか。偽牧師であるということはないだろうか。長老教会では教師・牧師になるためには3段階の試験を受けます。そこには教師を志願する人の研鑽という積極的な目的もありますが、同時にこの「偽教師誕生を防ぐ」という目的もあると思います。しかしそういうシステムがあるからと言って安心し切ってしまうことはできません。15節に「彼らは羊の衣を着てあなたがたのところに来るが、内側は貪欲な狼です」とあります。外見上は害をもたらす人のように見えない。むしろ優しく、謙遜で、人がよさそうで、何の問題もなし。聖書からいつも愛のメッセージを語ってくれる。しかしそんな牧師がまさか大問題を起こす偽牧師だったとは！ということがあり得るのです。歴史の教会の中では何度も起こりましたし、今日もそうです。ですから気をつけなければなりません。誰が判断するのでしょうか。それは信徒一人一人、私たち一人一人です。あの先生、あの牧師がこう語っているからと言って鵜呑みにしてはならない。気をつけて、その語る言葉は本当か、またその器は本物なのかと識別しなければならないのです。

もちろんだからと言って私たちはその反対の極端にも行き過ぎないようにしなければなりません。今日の箇所は決して「人を見たら偽預言者と思え」とけしかけている箇所ではありません。講壇に上る説教者を見るたびに、「私はお前なんかにだまされないぞ、お前は偽の説教者ではないのか」という態度でばかりいたら、その閉じた心にはみこたばが入りません。私たちにはもともと他人を認めようとせず、むしろ人の欠点探しをするのが好きという性質があります。7章1～5節で見たように、兄弟の目のちりを見

つけて、それを指摘し、ことさらあげつらうのが好き。そういう罪と一体になっていつも人を疑い、あなたは偽者ではないかと互いに疑心暗鬼になることがイエス様の意図したことではないでしょう。

イエス様はここで、偽言者たちを「実」によって見分けよと言っています。この「実」とは何でしょうか。「実」とはその人から生み出されて来るもの。私たちはまずその人の「行い」を考えるかも知れません。言うことが立派でも行いがなっていないければ、その人は偽者。ある意味でそうです。しかし単純にそう考えてしまうと、今日の箇所は読み間違えてしまうと思います。そのことは次の二つのことを考えると分かります。

一つは当時のパリサイ人たちのことです。彼らは当時の一般民衆から道徳的な人たちとして高く尊敬されていました。イスラエルの宗教に忠実で、信仰心に厚く、律法を真剣に守ろうとする真面目な人たちであると。そんな彼らに対して誰も「行いがなっていない」とは言わなかった。私たちが当時そこに生きていたら、彼らには「実」がきちんとあると思ったでしょう。彼らに向かって「あなたがたはよく実践し、立派な行いをしている本物の指導者、本物の預言者だ」と賞賛したのではないのでしょうか。しかしイエス様はたとえば 23 章 13 節で彼らに向かってこう言っています。「わざわざ、偽善の律法学者、パリサイ人。おまえたちは人々の前で天の御国を閉ざしている。おまえたち自身も入らず、入ろうとしている人々も入らせない。」 このようにイエス様は彼らのことを、人々を誤りに導く偽預言者だと言っています。ですからここで言う「実」とは、私たちが単純に考えるような「良い行い」のことではないと分かります。

もう一つの重大な証拠は 21~23 節です。イエス様は 21 節で「わたしに向かって『主よ、主よ』と言う者がみな天の御国に入るのではなく、天におられるわたしの父のみこころを行う者が入るのです」と言います。これもドキッとさせる言葉です。これは最後の審判の様子を語っている言葉です。その日に「主よ、主よ」と言う人がみな、天国に入るのではない。ある教会に行くとお祈りの最中に「主よー、主よー」と言っている人たちがいます。私たちがその人たちを見て、「あー、あれは天国に入れない」と見るというわけではありません。熱心に主の名を呼ぶことは良いことですが、いくら情熱的に主の名を呼び求めても、それでみな天国に入るわけではない。このような箇所を読むと私たちは口先だけの信仰ではなく、やはりそこに行かないが伴っていなければならないと早合点しがちです。しかし 22 節を見るとどうでしょうか。「その日には多くの者がわたし

に言うでしょう。『主よ、主よ。私たちはあなたの名によって預言し、あなたの名によって悪霊を追い出し、あなたの名によって多くの奇跡を行ったではありませんか。』ここで言われていることは「良い行い」ではないでしょうか。この偽者たちは口先ばかりの人ではなく、実践して来た人たちでした。多くのわざをなし、幾多の見える実を結んで来た人たちでした。だから自信があるのです。普通私たちなら、最後の審判の日に主の前に出てこう言えるでしょうか。人間のレベルでは多少誇れることがあっても神の前でアピールできるようなことは何もない。ところがこの人たちは違うのです。自分は合格！と言われるはずである。私は口先だけの者ではなく、実践して来た者だからである。悪霊を追い出してもらったりした周りの人も証言するでしょう。「私はこの人に助けられました。この人は私の恩人です。この人こそ神のしもべです！本物の牧師、本物の預言者です！」と。ところが最後のイエス様の言葉は大変ショックです。23節：「しかし、わたしはそのとき、彼らにはっきりと言います。『わたしはおまえたちを全く知らない。不法を行う者たち、わたしから離れて行け。』」私は地上で良いわざを行い、やがての日にはイエス様に誉められるとばかり思っていたのに、そのイエス様からまさかの言葉「不法を行う者たち！」と宣告され、拒絶される！ですから「実」とは単純に私たちが「良い行い」と考えるものとイコールではないことが分かります。

何が問題だったのでしょうか。どうしてこの人たちは良い行いをして来たのに、天の御国に入れないのでしょうか。それを解くカギは21節後半にあります。「『主よ、主よ』と言う者がみな天の御国に入るのではなく、天におられるわたしの父のみこころを行う者が入るのです。」ここに私たちが良い行ないと考えるものには2種類あることが分かります。それは「天におられる父のみこころを行なうという意味での良い行い」と「表面的には良い行いのようにだが、父のみこころには全くかなっていない良い行い」の二つです。これについてはたとえば前に見た6章1節からの部分を振り返ってみると分かりやすいと思います。6章では「人に見せるために人前で善行をしないように気をつけなさい」と言われて、ユダヤの代表的な3つの善行である「施し」「祈り」「断食」が取り上げられました。それらを行っているある人は、自分は良い行いをしているという自負心を持っています。また周りの人々も、あの人は口だけではなく行いが伴っている人だ！本物の信者だ！と賞賛する。ところがイエス様は、パリサイ人らのようなあり方については偽善者だ！偽者だ！と言われる。なぜでしょうか。それは人から見れば良い行いかもしれないが、すべてをご覧になる天の父の前ではそうではないからです。彼らはただ人にほめられたくて、そうしているだけであって、本当の敬虔な心はそこにない。

外側を繕って信心深い人のように見せかけているだけ。それでは神に賞賛されるものにならない。それでは天の父のみこころにかなう行いとは何でしょうか。まさにイエス様はそのことについてこれまで山上の説教においてずっと語って来られたと言えます。イエス様は5章20節でこう言っておられました。「わたしはあなたがたに言います。あなたがたの義が、律法学者やパリサイ人の義にまさっていなければ、あなたがたは決して天の御国に入れません。」 こう述べて、律法学者やパリサイ人の義にまさる義の生活、すなわち天の父のみこころにかなう歩みについて語って来たのです。

ですから偽預言者をその実によって見分けるという時、それはこの山上の説教の教えに照らしてということになります。たとえばこれまで見て来た山上の説教の最初と最後に注目するなら、冒頭の5章3節から天の御国の民の特徴としていくつかのことが語られました。心の貧しい者、悲しむ者、柔和な者、義に飢え渴く者、あわれみ深い者、心のきよい者、平和をつくる者、義のために迫害されている者。これらの特性が見られなければ怪しいということになります。高ぶっていたり、義をいい加減に考えていたり、あわれむ心がなかったり、平和を壊すような人であったり、……。あるいは前回見た御言葉から考えれば、「狭い門から入れ」と言わない人。その教えに「細い道」がない人。もっと安易な道、皆に受け入れられるような広い道を行くことを勧める人。こういった誤りを見抜くためには、単に山上の説教の教えに照らして判断するというだけでなく、自分自身がここに生きていることが欠かせないのではないのでしょうか。自分自身がこの山上の説教の教えに導かれて、いくらかでも「実」を結ぶ歩みをしていなければ、他人の実をその視点で正しく見分けることはできないと思います。むしろこの世が賞賛する「良い行い」の考え方に簡単に持って行かれてしまい、偽預言者たちの外側の華々しさに目を奪われて、一緒に誤った広い道を進んで行ってしまふ。

さらに思いを深めて自分自身の実を結ぶ生活について考える際、より大事になって来るのは、私はその良い実を生み出す良い木であるのかということです。17節にあるように、良い実が良い木から出て来ます。私たちが良い木でなければ良い実は出て来ません。ですから問うべきは、私は良い木なのかということです。聖書が語るように、生まれながら「良い木」である人は一人もいません。イエス様は他の箇所でもこう言われました。「人から出て来るもの、それが人を汚すのです。内側から、すなわち人の心の中から、悪い考えが出て来ます。淫らな行い、盗み、殺人、姦淫、貪欲、悪行、欺き、好色、ねたみ、ののしり、高慢、愚かさで、これらの悪は、みな内側から出て来て、人を汚すのです。」

私たちの本性はいわば腐った木のようなものです。その木が悪いので、そこから色々な悪い実が出て来る。私たちが口にする汚い言葉、悪い考え、悪い行動はすべて、私たちがどんな木であるかを示しています。しかし聖書が語る素晴らしいメッセージは、そのような悪い木であった私たちがイエス様によって良い木に変えて頂くことができること、そして良い実を結ぶ者になれるということです。それはただ自分の徹底的な無力さを告白して神に近づくことを通してです。「心の貧しい者は幸いです。天の御国はその人たちのものだからです。悲しむ者は幸いです。その人たちは慰められるからです。」 自分自身という木は腐っていて、自分ではどうしようもないことを認めて神に近づいたら、神はイエス様の十字架を通して私たちの罪を赦し、ご自身の民として受け入れてくださる。さらに造り変えてくださるとも言われています。ヨハネの手紙第一 1 章 9 節：「もし私たちが自分の罪を告白するなら、神は真実で正しい方ですから、その罪を赦し、私たちをすべての不義からきよめてくださいます。」 私たちはこうして新しい性質を持つ「木」へと変えて頂けるのです。私たちはイエス・キリストを信じて、ある意味で根本的に以前とは異なる者へと聖められましたが、まだ最後のゴールには達していません。ですから良い実を生み出し得る良い木とされてはいますが、益々良い木へと日々変えられて行くことができます。益々この山上の説教の教えに従って生きる者へ、ここに述べられている真の意味での良い実を結ぶ者へ、と。またそうでなければなりません。そのように自分自身が日々ここに生きてこそ、目の前の預言者たちを見て、その実を見て、それが神のみこころを行うという実であるのか、それともそうでないのかを見分けるように導かれるのではないのでしょうか。そして自らがそのように歩む取り組みを経て、やがての最後の日に主にお会いする時、「わたしはあなたがたを知らない」と言われることなく、むしろ主の恵みによって神のみこころを行う歩みを導かれて来た者たちとして、天の御国に迎え入れられる者とされるのです。

イエス様は良い実が良い木から出ると言われました。私たちが今日、自らに問うべきは、果たして私は良い実が出て来る良い木であるかということです。自分自身はどういう木なのか。良い木なのか。悪い木なのか。もし良い木でないことを思うなら、悪い実ばかりが出て来る木であることを思うなら、イエス様のもとへ行って、自分のこのあわれな状態を告げ、イエス様の十字架を通して罪を赦していただき、さらに聖められる恵みにあずかりたいと思います。そして良い木とされて喜んで山上の説教に従い、父なる神のみこころを行う者でありますように。そうして偽預言者たちを見分けていのちに至る道を進み、かの日に「わたしはあなたを知っている」とイエス様に言われ、天の御国

に迎え入れられる者の幸いに歩みたいと思います。